

年、海運業で勉強したくらいで、太刀打ち出来る訳がありません。

「龍馬に海運業は無理」と判断した薩摩の上層部は、以後、龍馬に長州藩との折衝役を任せるようになっていきました。当時、薩摩藩は活発な交易活動から利益を得ていましたが、長崎奉行所に監視され自由に出来ず、幕藩体制への不満が生じていました。そこにイギリスがグラバー商会を介して、武器・弾薬・艦船等を日本市場に向けて輸出し始めました。あたかも討幕運動を煽るかの如くでした。

龍馬は犬猿の仲である薩摩と長州の間に入って、両者結び付けました。しかしこれは龍馬一人の手柄ではありません。大河ドラマではあまり描かれませんが、長州藩も薩摩藩も、幕末にイギリスに密航者を送り込んでいます。薩摩出身者（五代友厚、寺島宗則など）と長州出身者（井上馨、伊藤博文など）は、ロンドンやパリで、同じ日本人ということで会話を交わしたりはしています。西欧列強の実力を目の当たりにした彼らは、「薩摩と対立している場合ではない」と悟り、新国家建設に向け協力を誓い合ったに違いありません。帰国後、彼らは薩長のパイプ役も果たし新しい官僚群となりました。薩長同盟の成立は、彼ら密航組が実務スタッフとして奔走した結果でもあります。また、長州

の高杉晋作は、イギリス植民地下の上海で、中国人が鎖に繋がれ鞭打たれる風景を見て衝撃を受け、強い危機感を抱いて帰国しますが、そうした危機感が広く共有されたことも、薩長同盟成立の背景にありました。薩摩は、もともと会津と同盟を結び長州と対立していません。しかし会津を切り捨て長州と手を結んだのです。

大政奉還、それぞれの思惑

龍馬は、「天皇と幕府という二つの統治者がいるから混乱する。幕府は速やかに大政奉還し、天皇の下で新国家を建設する。議院制度を導入し、陸海軍を整備して世界に伍していく。そうしないと日本は植民地になつてしまう」と考え、「船中八策」を書き上げます。西郷や桂小五郎は、「幕府は外ぞう。私達だけでやる」と言いましたが、龍馬は、「徳川氏も最大大名として仲間に加え、大名連合政権を作ろう」と言いました。

幕臣達も迷っています。薩長側は確実に力をつけてきていて、長州征伐では幕府軍を打ち負かしました。徳川慶喜は英明で名高い将軍でしたが、信用なりません。朝は「絶対に勝つ」と意気軒昂だけど、夕方になると「負けるかもしれない」と急に弱気が、「お

腹が痛くて寝ています」「風邪を引きました」などと云って肝心な時に姿が見えなくなるのです。余談ですが、慶喜は黒豚が大好きで「豚一公」とあだ名されていました。薩摩藩は幕府と交渉する際、薩摩の大家族・肝付家の末裔で主席家老の小松帯刀に、黒豚を土産に持たせたと云われています。慶喜は小松の訪問で大変楽しみにしていて、本当に仲が良かったようです。

結局、「大政奉還後、あなたを初代総理にする」と龍馬が言ひ、小松帯刀も太鼓判を押すから慶喜は独断に近い形で大政奉還しました。これが策略です。龍馬と小松帯刀の役割は慶喜を騙して大政奉還させるまで。その後、龍馬は殺され、小松帯刀は京都から鹿児島に追われました。薩摩藩は軍事クーデターを起こし、徳川慶喜と松平容保を京都から追放します。

当時の薩摩藩では、西郷や大久保ら下級武士は倒幕派でしたが、藩主・島津久光ら上級武士は幕府との戦争に反対でした。西郷らは上層部を説得するために、天皇を利用しました。岩倉具視らが倒幕の詔勅を書いたのです。西郷らは偽の詔勅を持ち帰り、島津久光にちらっと見せました。筆跡も印鑑も確認出来ない一瞬だけだったのがミスです。天皇のご威光で藩論は倒幕に決定、京都に出兵しました。長州も同様でした。

誰が龍馬を殺したか

私は、「龍馬が生きていれば戊辰戦争は起こらなかった」という本を書きました。徳川慶喜を初代総理に据えろ、という龍馬の新政府構想も、彼の死で潰されました。

誰が龍馬を殺したのでしょうか。何か悪いことが起こるとすぐ会津藩のせいにする風潮がありますが、会津藩としては龍馬に頑張ってもらいたい訳です。大政奉還前、龍馬と後藤象二郎と会津藩の重臣が参加した会議で、龍馬の新政府構想は承認されています。慶喜の立場を守りたい会津藩が、龍馬を殺すとは考えられませんでした。

実は、勝海舟こそ曲者です。官軍が攻めて来た時、西郷と古い友達だった海舟は、二人で品川で会談し江戸城無血開城を決めます。ここからは私の推理です。